

横浜植物会ホームページ <http://yoko-syoku.sakura.ne.jp/> (変更しました) 上記QRコードで閲覧可アズキナシ属 (*Micromeles*) の独立種キミノウラジロノキ

会長 勝山輝男

キミノウラジロノキ *Micromeles calocarpa* (Rehder) M. Aizawa

キミノウラジロノキは奥日光で採集された標本に基づいて、ウラジロノキの変種 *Sorbus japonica* var. *calocarpa* として記載されたが、その後、ウラジロノキの異名または果実が橙黄色の品種 f. *calocalpa* として扱われ、多くは区別されてこなかった。Aizawa (2021) は奥日光でウラジロノキとされてきたものはキミノウラジロノキであり、ウラジロノキとは葉が大きく、基部は円形で、縁は浅裂して裂片は重鋸歯縁、下面に宿存する白綿毛が密生する点で区別できることを明らかにし、新ランクおよび新組み合わせとなる *M. calocarpa* を提案した。国内の主だった標本庫から奥日光、鼻曲山、奥秩父十文字峠付近、富士山、八ヶ岳、南アルプス、北アルプス針の木谷などの標本が見いだされ、ウラジロノキよりも少し標高の高いブナ帯上部から亜高山帯下部(標高 1500~2100 m)に分布していることが明らかにされた。

生命の星・地球博物館のウラジロノキの標本を調べたところ、キミノウラジロノキは埼玉県十文字峠、長野県川上村梓山〜常楽院平、富士山、八ヶ岳の標本が計8点あった。残念ながら丹沢など神奈川県産の標本はすべてウラジロノキであった。10年以上前のことになるが、八ヶ岳の赤岳から県界尾根を下り、小天狗〜防火線の頭の標高 1900 m あたりで、葉が大きくて、葉下面がやけに白いウラジロノキがあった。おそらくそれがキミノウラジロノキだったのだろう。

和名は「黄実」であるが、果実は橙赤色に熟すものが多く、「黄実」とは限らないようだ。ウラジロノキとキミノウラジロノキの標本での良い区別点はやはり葉の形と思われる。両者の区別点を簡潔にまとめた。

・ウラジロノキ・・・葉の基部は広いくさび形、葉縁は欠刻状に浅裂し、裂片の縁には単鋸歯があり、最下の側脈に外向きの支脈はない。

・キミノウラジロノキ・・・葉の基部は円形または切形、葉縁は欠刻状に浅裂し、裂片の縁には重鋸歯があり、最下の側脈に外向きの支脈が出る。

アズキナシやウラジロノキは『日本の野生植物』の旧版

(佐竹ほか, 1989) では広義ナナカマド属 (*Sorbus*) に含まれていた。しかし、最近の分子系統学では単葉をもつアズキナシやウラジロノキはナナカマド属とは系統的に独立することが明らかになり、『改訂新版 日本の野生植物』(大橋ほか, 2016) や『神奈川県植物誌 2018』ではナナカマド属から分離されてアズキナシ属 (*Aria*) とされた。さらに最近では *Aria* 属とは別系統で、*Micromeles* 属にまとまることが示され (Aizawa, 2021)、アズキナシは *M. alnifolia*、ウラジロノキは *M. japonica* となった。アズキナシ属 (*Micromeles*) は東アジアに 54 種が知られ、*Aria* 属はヨーロッパ、北アフリカ、西アジアに 59 種、狭義ナナカマド属 (*Sorbus*) は北半球に 104 種がある (Plants of the World Online)。

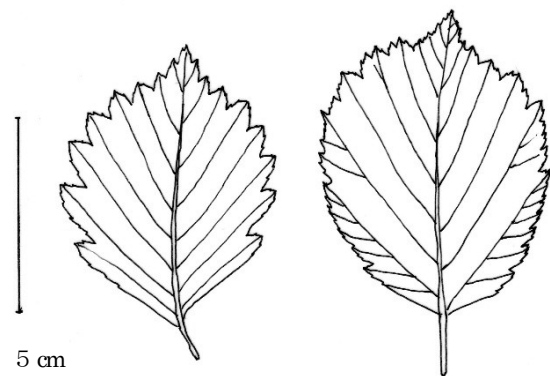
## 文 献

Aizawa, M., 2021. An Overlooked Tree Species, *Micromeles calocarpa* (Rehder) M. Aizawa (Rosaceae), from Central Japan. *Acta Phytotax. Geobot.* 72 (1): 23-42.

大橋好広・門田裕一・邑田 仁・米倉浩司・木原 浩編, 改訂新版 日本の野生植物 3. 338pp. 264pls. 平凡社, 東京.

Plants of the World Online (<https://powo.science.kew.org/>) (accessed on 2025.12.27)

佐竹義輔・原 寛・亘理俊次・富成忠夫編, 1989. 日本の野生植物 I. 320pp.+304pls. 平凡社, 東京.



左:ウラジロノキ (神奈川県清川村 KPM-NA0125416)

右:キミノウラジロノキ (長野県川上村 KPM-NA0062018)